

黄金の海 谷恒生



黄金の海

谷 恒生



文藝春秋

谷 恒生 (たに・こうせい)

1945 (昭和20年) 東京生まれ。鳥羽商船高校卒業。一等航海士。77年「喜望峰」、78年「ホーン岬」で直木賞候補となる。著書に「マラッカ海峡」「黒いヴァイキング」「北の怒濤」などがある。

黄金の海

昭和五十五年五月二十日第一刷
昭和五十五年六月十五日第二刷

定価 九八〇円

著者 谷 恒生

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五・一二二一

印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

黄金の海／目次

第一章 マンハッタン

5

第二章 戦場へ

57

第三章 黒い大陸

91

第四章 ダイヤモンド

146

第五章 コンゴ河口

194

A 装
D 幀

坂 生
田 頼
政 範
則 義

黄金の海

第一章 マンハッタン

流山寺鴻は唐突に眼を醒ました。霧がかった頭の内部でしばらくさまさまな夢の断片が舞っていた。記憶の層に埋もれていた男女が、ぶつ切れに現われては消えていく。

だが、不思議なことに、どの場面にも冬子の姿はなかった。時間の経過が、冬子への未練を色褪せたものにしてしまったのだろうか。

苦しい嫉妬の感情を抱いて無頼な外国船籍の貨物船を渡り歩き、ふと気づくと、四年が経っていた。

流山寺は寝台から億劫そうに上体を起こした。書類が散乱している事務机の上に手を伸ばすと、一、二本しか残っていないキャメルの箱を掴んだ。

真鍮の丸枠に緑青が浮いた舷窓に、飛沫が白く湧き返っている。砂袋を叩きつけるような重い波の衝撃が舷側を通して響いてくる。

海は依然、荒れ模様だった。

流山寺は吸いこんだ煙草のけむりを、溜息混じりに吐きだした。だいぶ寝汗をかいたようだ。鎖骨のくぼみに汗がねっとり溜まっている。

女房に裏切られ、船員仲間に裏切られ、日本の船会社とびだす羽目になった船乗りが、寝台に坐りこみ、途方にくれたような表情で煙草をくゆらしている。

しまらない話だ。

胸に、あのにがい記憶がこみあがってくる。

四年前、ローテーションの都合で、横浜入港が二日、早くなった。

沖錨泊の船から交通艇に揺られて大棧橋の通船発着所に着いたのは、午後十時を過ぎた頃だった。

湿った港風が髪を散らして吹きぬけていく、浦賀水道から海鳴りが野太くどよめき、埠頭に繋留している貨物船の群れが、灯火をイルミネーションのようにきらめかしている。

流山寺は金沢八景のアパートヘタクシーをとばした。

冬子と結婚して二年目、生活もようやく地についてきた。独りの頃は各地の港で財布が底をつくまで遊び歩いたものだが、このごろはほとんど夜遊びせず、酒もひかえ、金を無駄に使わなくなった。いろいろな意味で欲ができた。

表通りでタクシーを停め、はやる気持を抑えて暗い路地を歩いていった。

小雨が降りだしたようだ。忘れられたようにぼつんと立つ街灯の光に、細かな雨滴が紙ふぶきのように散っている。

外についた鉄の階段を一步步踵を押しつけて昇った。部屋の前で立ち止まり、右手に下げたアタッシュケースを握り直した。

金ぐさりのついたオバールのペンダントが入っている。香港のコンノート通りで買った冬子への土産である。少少高かったが、冬子のほっそりした首すじによく似合うはずだ。

インターホンを押した。電話をしなかったのは、冬子の驚く顔が見たかったからだ。

しばらく待っても、ドアは開かなかった。

苦笑しながらもう一度、インターホンを押した。夜遅くチャイムが鳴るのは、あまり気持のよいものではない。一人暮らしを続けている冬子にはなおさらだろう。やはり、電話をかけておくべきだった。

心配がした。ドアのくさりがいっぱいに開いて、隙間から冬子の顔がのぞいた。

微かな悲鳴が唇からこぼれた。みひらいた眼がまばたきもせずに見つめている。

血の気の失せた顔に破片^{かけら}ほどの喜びもない。わななく唇が恐怖を現わしていた。

「開けろ！」

流山寺は我知らず怒鳴った。おそろしい不信が身体中に湧き起こった。

かすれた音を立ててくさりがはずれた。冬子は貧血を起こしたようにその場へよろめき倒れた。はだけたナイトロープの襟もとで、汗ばんだ乳房が揺れている。

流山寺は逆上した。駆けあがり、蹴破りそんな勢いで寝室のドアを開け放った。

視線が凍りついた。寝室に男がいることは確信していた。だが情事の相手までは想像できなかった。相手が冷水を浴びせられたようにベッドから跳ね起きた。横顔をベッドライトの光が闇から浮きあがらせた。

同僚の船乗り、つい四カ月前まで共にインド洋を航海していた一等機関士だった。

流山寺は一瞬、立ちくらみを覚えた。真暗な谷底を落ちていくような失墜感が襲いかかってきた。

「殺さないでくれ！」

男が金切声をあげた。

途切れていた意識が戻った。

気づかぬうちに右手に手製のシーナイフを握りしめている。諸刃のナイフは三面鏡の横に置いてあるロッカー

の奥にしまつてあつたものだ。乗船中、三十センチほどの角ヤスリをガスバーナで焼いては冷やし、旋盤にかけ、刃を入れて研ぎあげた。暇にまかせて十分に鍛えあげたせいか、切れ味は鋭い。荷敷板で作つた柄を銅線で巻き、さらして丹念に巻きしめてある。

邪魔な分別が麻痺した瞬間、殺意が芽生えたにちがいない。

流山寺はシーナイフを握り直した。ベッドライトの光を浴びたナイフが、鋼独得の硬質なひらめきを放っている。

「殺しはしない」

自分でも驚くほど無機的な声だった。

流山寺はだらりと両腕を下げ、夢遊病者のような足どりでベッドに近づいていった。

素っ裸の一等機関士は釘付けされたように動かない。瞳孔が拡散し、唇が半開きになっている。必死にしばらくだそうとする声が、こみあがる恐怖で喉のところでせき止められてしまったのかもしれない。さっきまでいきり立っていたはずの男根が、陰毛の中にみにくもぐりこんでいる。

鋭い無声音が膠着した空気を突き破った。鈍い衝撃とともにシーナイフが壁に深々と突き刺さった。

「俺は狂っていない。狂わないことがどれだけやすい

かおまえにわかるか」

流山寺はほとんど唇を動かさずに呟いた。

一等機関士が肩で激しく呼吸している。歯と歯の細かくぶつかり合う音が口の中で鳴りつづけている。

流山寺がふつと笑った。身体中の毛が総毛立つような、陰惨な笑みだった。

右の拳が無造作に突きだされ、一等機関士の顴骨にめりこんだ。一等機関士が叫び声をあげてのけぞった。歯の折れる気味の悪い音が鳴った。唇の端から血がしたたり、糸を引いて顎のくぼみにつたい流れていく。

流山寺は打ちすえられた家畜のように蹲る一等機関士の髪を掴むと、力まかせに床へ引きずり落とし、脇腹を何度も蹴りつけた。一等機関士は、そのたびにきたならしくうめいた。

流山寺は相手の反応がなくなるまで執拗に蹴りつづけた。

冬子は寝室のドアにしがみついていた。疎んだ眼が流山寺を凝視している。頬へ乱れ散る髪の毛の陰からのぞく凍りついた眼に、変質者を見るような怖さまじさが現われていた。

流山寺は喉の奥で、獣じみた唸りを発した。鮮烈な怒りが臓腑を裂いて燃えあがった。血が逆流し、全身が瘡のように震えだした。

床を蹴って冬子にとびかかると、腕をねじあげ、その場へ押し倒した。冬子は悲鳴をあげ、身体をくねらせて逃げようともがいた。

その拒絶が、流山寺の情念をさらに激しくかきたてた。ナイトロープを破りすて、背後から乳房をねじあげた。廊下に押しつけた冬子の横顔が苦痛で歪んだ。

力づくで冬子の膝を割った。腰が浮きあがり、大腿の奥の鬚りが無惨な恰好でさらけだされた。

湿った部分へがむしやりに指を差しこんだ。一等機関士の精液が指先にねばりついてくるような不快感だった。流山寺は砕けるくらい奥歯を噛みしめた。嫉妬がこれほどなまなましい感情だとは思ってもみなかった。

冬子の唇から嗚咽がきれぎれに洩れる。恐怖に身をふるわせている。

冬子にとって、流山寺はすでに夫ではなく、サディステックな暴行魔にすぎなかった。凌辱されている意識でいるのだ。

眼尻に自嘲がにじんだ。妻を凌辱しなければならぬ自分がみじめだった。

身体を冬子から離れた。全身の力が一挙に脱けてしまったような虚脱感に襲われ、妻と一等機関士をそのままにして、アパートをよろめき出た。意識は奇妙なほどがらんだ。うだ。

それっきり冬子と会っていない。

流山寺は眼の奥を強く押した。

眠気はどうやら去った。寝台から降り、回転椅子にだらしなくもたれこんだ。

壁の水晶時計が零時をまわろうとしている。当直には四時間ばかり間がある。中途半端な時間に眼を醒ましてしまった。

棚からジャック・ダニエルを取りあげ、やけ気味に口へ放り込んだ。焼けるような痛みが喉を押し通り、胃へ落ちていった。

鋼壁越しに大西洋の海鳴りが響いてくる。黒い海面が盛りあがり、沈み、重くどよめく。

ニューヨークまであと二日。

海は荒れそうな気配だ。カリブ海あたりでハリケーンが発生したのかもしれない。

ノックが鳴った。ドアが細目に開いて、澄んだ眼のぞいた。

「入りな、ルイ。遠慮はいらないぜ」

流山寺が投げつけるように声をかけた。ようやく二十歳になったばかりの黒人甲板員だ。

ルイ・レイホールドはいつになくためらいがちに船室へ入ってきた。表情が強ばっている。なにか思い詰めているようだ。

「一等航海士、ニューヨークで下船するんですか」

流山寺がやわらかく微笑した。「この船にも飽きた。

マンハッタンで乗り心地のよさそうな貨物船を捜ささ」

「俺も降りますよ」ルイが急きこんでいった。

「契約満了の下船なんだ」

「そいつはけっこうじゃないか。下船祝いにいっぱいどうぞだ」

流山寺がグラスにジャック・ダニエルを充たし、長椅子に腰を降したルイへ手渡した。

ルイは、にがい薬でも飲むように顔をしかめて、一息に喉へ流しこんだ。

潮の流れが強い。船の動揺周期が眼に見えて大きくなつた。ダイナモ発電機の単調な持続音が寝しずまった船内にうつろに響く。リノリウムの床を這う機関の振動が、靴底から鈍くふくらはぎに伝わってくる。

「一等航海士、下船は俺が原因じゃないんですね」

ルイが俯けていた視線を流山寺の顔に向けた。長い睫毛が不安そうに瞬いた。

十日ほど前、ギリシャ人の船長とひと悶着があった。きつかけをつくつたのがルイだった。

霧の濃い夜で、船長は航海士と操舵手の船橋当直のほかに、甲板員一名を翼見張りとしてつけ加えた。

レーダー装備、自動コントロールの近代貨物船に甲板

員の肉眼見張りを配置するとは、いかにも権威をふりかざす時代錯誤の船長らしい。沿岸づたいならまだしも、船はべた風のカリブ海を航走っているのだ。衝突の可能性は百パーセントないといっても過言ではなかった。

ルイは翼で頬づえをつき、霧に視界をさえぎられた海に眠そうな視線を送っていた。

船首楼が微かな海の起伏に合わせて呼吸のように上下する。単調な機関の振動が睡眠を誘うように響いてくる。

ルイは退屈しのぎに口笛を吹きはじめた。黒人はよく一人で口笛を吹く。血の中に旋律が流れているのだろう。哀感にみちたブルースだ。

背後で靴音がした。振り向いたルイの頬に、船長の平手打ちが唸りをあげてとんだ。

「不謹慎なニグロだ」船長が怒鳴りつけた。

「おまえも船乗りなら口笛が船で禁止されているのを知っておるだろう。それを何だ。見張りの最中に、聞こえよがしに吹きおって」

ルイは船長の剣幕にすっかりおそれをなし、怯えた小猫みたいに畏縮してしまった。

船長の怒りに拍車がかかった。

「おまえのようなうすぎたないニグロは金輪際わしの船に乗せん。いままでの荷物をまとめて降りていけ」

「いわれなくても降りていくさ」

ルイの態度が一変した。皮膚の黒さだけで蔑視され続けて育った者の暗い憤りが激しく衝きあがってきたのだ。「俺は契約が満了するんだ。降りるついでにえらそうな面に一発おみまいしてやろうか」

ルイが拳をかためた。船長の顔に狼狽が現われた。

「止しな」

船橋のドアを開けて流山寺がのっそり翼に現われた。

「船長、黒人というだけで侮辱するのはよくないな。ルイは白人の甲板員よりよほど働き者だぜ」

「ニグロが船長に齒向かった。それだけで懲戒免職の理由になる。一カ月分の給料は没収だ」

「ふざけるなよ、船長」流山寺が一步詰めよった。

「そんなことをしてみろ。これから枕を高くして眠れなくなるぜ」

五日後、流山寺にオーナーから下船命令が届いた。別に理由はない。

「潮時だな」

流山寺はジャック・ダニエルを舌に乗せた。窓に海が広がってくる。闇に含まれた救いようのない海から、重い虚無のにおいが湧きあがってくるように思えた。

雨だれがうすよごれたガラス窓に縞模様を描きつつける。路地をへだてた向かい側に軒を連らねた安酒場のネ

オンが、降りしきる雨の斜線にまたたき、皮膚病の野良犬が崩れかけたビルに放りだしてあるゴミバケツを漁っている。

流山寺は、ガラスの底にたまっているバーボンをすりこむと濁った眼をぼんやり野良犬に向けた。

無精髭だらけの頬が自嘲で歪んだ。いまの状況は、びしょ濡れで残飯を漁る野良犬と似たようなものだ。マンハッタンでギリシャ船籍の貨物船を降りて三カ月、

ボケツトには十ドル紙幣が三枚しか残っていない。流山寺はくたびれたジャケツトの襟を立てると、グラスをかがけて、プエルトリコ人のバーテンに四はい目を注文した。

バーテンは、懐具合をさぐるようにじろりと眺め、薬品くさいバーボンをきっかりシングル分、グラスに注いだ。

流山寺は五十セント玉をすすけたカウンターへわざと音を立てて置くと、グラスのバーボンをすすった。

十月下旬のマンハッタン。日を追うごとに空気が冷えていく。

一泊一ドルのパウワリドミトリの木賃宿で当てのない船を待つすかんぴんの船乗りには、なんともころぼせい季節だ。街路樹の枯葉が凍てついた風に舞い、冷気の棘が容赦なく皮膚にくいこんでくる。残酷なニューヨークの冬の足

音が、すぐそこまで迫っている。

流山寺は疲れたように視線を足許に落とす。

酒場にこもる熟し柿のような饅^{あんもち}えた臭いが鼻孔の粘膜にからみついてくる。船を降りてからウォール街やチャイナタウンの安酒場で酒びたりの毎日を送り、この十月、マンハッタン最下級のスラム街へ軽くなった財布を抱いて吹きよせられてきたのだ。

少し離れたカウンターで、黴^{いもち}みtainなイタリア野郎と素肌にすり切れた皮ジャンパーをひっかけたニグロの大男が、顔を寄せ合い、密談めかして話していた。

いびつな漆喰の床に脚の歪んだテーブルが雑多に置いてあり、仕事にありつけなかったメキシコ人の沖仲仕連中がジンをちびちび飲^やりながら、いつまでも愚痴をこぼし合っている。

陰毛をフロンドに染めた黒人女のヌードポスターが、緑色のベンキを塗りつけた壁ではがれかけていた。

船乗りにも、沖仲仕にも、ブルックリン橋のたもとにひしめき合っている船員酒場で淋しがり屋の船乗りどもをやさしく迎える娼婦たちにも、住みづらい世の中になっってしまった。世界中がベトナム特需に湧き返っていた頃なら、宵のうちから公衆便所のおいのこもる安酒場でくだを巻いている暇などなかった。ハドソンリバーに突きだしたおびたしい栈橋で、一日中、汗みどろにな

って荷物と格闘しているはずだ。

流山寺はグラスを軽く振った。グラスの中でわずかばかりのバーボンが毛羽立つように揺れた。

この三カ月、下船した貨物船の事務長に紹介された船員斡旋代理店へ三日と開けず、足を運んだ。そのたびに、中年の船員配乗係が眼鏡の奥から暗に袖の下を催促する。木賃宿にたむろしてる船にあぶれた船乗りどもの噂によると、いろいろの相場は千ドルらしい。乗船中ならほんのはした金だが、いまは、その千ドルが喉から手がでるほど欲しかった。

流山寺はグラスを惜しそうに飲み干すと、太い溜息をついた。とにかく八方ふさがりだった。

カウンターを離れた時、酒場のスイングドアが開いた。酔いどれどもの視線が一斉にドアに向いた。

女だ。

生えぎわの鋭い額からななめに流れた亜麻色の髪が、酒場にただよう黄ばんだ光を集めて鈍い光沢を放っている。濡れた髪の前からしずくが神経質そうな頬をつたい落ちていく。

女は息を詰めて酒場を見まわした。引き結んだ唇が微電流に触れているようにふるえている。

酔いどれどもの眼が、好奇の光を帯びるのも無理はない。彼女の服装は日本の山谷や釜ヶ崎に匹敵するニュー

ヨークの貧民街、パウワリにおよそ似つかわしくなかった。

浅みどり色のレインコートの腰を白いベルトで締め、ほっそりした首筋に銀色のシルクスカーフを巻いている。大粒の真珠で形のよい耳を飾り、細い左の首首に小さなブラチナの腕時計をはめている。黒エナメルの手首に小さなバッグを持った中指に二カラットはあるダイヤが燦然と輝いていた。

女は酔いどれの視線へ挑むように尖がった顎を反らし、脱いだコートを腕にかけると、カウンターにつかつかと歩み寄ってきた。仕立てのいいライトブルーのスーツの襟からベージュのブラウスがのぞき、小さな胸が緊張を鎮めるように呼吸を繰り返している。

女はブラッディマリーを頼んだ。バーテンが飲みものをつくっている間、苛立たしげに中指の爪でカウンターのたいたいでいた。

「お嬢さん、どなたをおさがしなんで」

ニグロと話していたイタリア野郎がジンの壺をぶらさげて女のとなりに移り、厚かましく声をかけた。片肘をカウンターにつき、下卑た笑みを口の端に浮かべて舐めるように女を眺めた。

女は相手を蔑むように見つめ、バーテンが珍しくコースターに乗せて置いたダイヤカットのタンブラーを両手

で握りこみ、ブラッディマリーを吸いこむようにして含んだ。

「邪険な面をするものじゃないぜ、おまえさんの役に立つと思うてるのによ」

イタリア野郎はよごれた歯をむきだし、なれなれしく女の手首を握った。

「パウワリにはいろんな連中が紛れこんでくる。どいつもこいつも堅気の世界をくいつめてきた半端者だ。お嬢さんには少しばかり荷の重い手あいだぜ」

「よけいなおせっかいよ」

女が腕を振り払った。くるみ色の眼が嫌悪をあらさまにあらわしている。

「あたしがどんな目的でこの酒場に来ようと、あんたにはなんの関係もないわ」

「鼻っばしらの強いお嬢さんだ」

イタリア野郎が喉をひきつらせて笑った。酔いどれたちのふくみ笑いが波のように広がった。

「気をもたせないで白状したらどうだ。なまっ白い恋人があんたを嫌ってこの界限に逃げこんできたってしまらねえ筋書なんだろう」

イタリア野郎はジンをひとくち、ラッパであおりつけ、酒くさい息を女に吐きかけた。

「喋りづらいんだったら二階にあがろうじゃないか。寝

台で添い寝しながらゆっくり相談しようぜ」

いきなり、女がタンブラーをイタリア野郎の足許に叩きつけた。派手な音とともにタンブラーが砕け散り、床が血をぶちまけたように赤くなった。

「なにをしやがる」イタリア野郎があわをくつてとびのいた。

女はハンドバッグから札入れを取りだし、印刷のにおいがたがよっているようなまあらしい十ドル札をカウスターへ置いた。

「こわしたタンブラーと床のクリーニング代も一緒よ」バーテンに鋭い声を投げつけると、踵をかえしてドアへ歩きだした。

酒場がどよめいた。沖仲仕たちがそれぞれ床を踏み鳴らし、口笛を吹いてはやしたてる。

「待ちやがれ」

イタリア野郎が血相を変えて女の華奢な肩をわし掴みにした。

「気取るんじゃねえよ、お嬢さん。ここは地獄の一丁目、迷いこんだのが運のつきだ。怪我をしたくなかったら、財布ごと酒代を置いていきな」

イタリア野郎は、ふりほどこうともがく女の腕からハンドバッグを力まかせにもぎとった。

「みっともねえ真似は止めな」北部訛りの強い伝法な英

語が背後から聞こえてきた。流山寺がイタリア野郎に憂鬱そうな視線を投げた。

「いくらバウワリでも、追い剥ぎを黙って見逃すわけにはいかない」

イタリア野郎が殺気立って振り向いた。

流山寺は、カウスターに覆い被さるようにしてバーボンのグラスを傾けている。無精髭だらけの顔面から表情が消えていた。

「なんでえ、息のくせえ東洋猿じゃねえか」
イエローモンキー

イタリア野郎がうすっぺらい唇を歪め、女の腕を突き離れた。細く尖がった眼に、陰險な光が宿った。

「よりによって東洋猿から喧嘩を売られるとは、俺もずいぶん堕ちたものだぜ」

イタリア野郎は聞こえよがしにいうと、両脇を締めて腕を構え、踵を軽く浮かせた。

「あやまるならいまのうちだ」イタリア野郎が抜けめなく距離を詰めながら、威嚇するように凄味をきかせた。

「十年ほどまえ、クダンのブドウカンで日本人のボクサーと対戦してな、そいつは五ラウンドともたなかったぜ。俺の拳がやつのはそっかい顎を叩き割ったってわけだ」

流山寺が背筋を伸ばすようにしてカウスターから離れ、ゆっくりと相手に向き直った。腰をやや落とし、両腕はだらりとたらしただけだ。どういふつもりか、右手にグ

ラスを握りしめている。

イタリア野郎が頬に残忍な笑みを刻んだ。糸のように細い眼から刺すような光がほとばしった。

酒場が水を打ったように鎮まり返った。酔いどれたちは、突然のファイティングショーを、固唾をのんで見つめている。

イタリア野郎が唇を舐めまわしながら、二、三度、誘いのジャブを放った。流山寺の眼もとに微かな笑みが浮かんだ。相手を愚弄する笑みだ。

イタリア野郎のこめかみに静脈が駆けた。喉の奥から唸りを発し、すばやいストレートを繰り出した。必殺の一撃が、小ざかしい東洋猿の顎を確実に砕くはずだった。

だが拳は、案に相違して、むなしく空をきった。一瞬間の隙を突いて、流山寺の蹴りが股間に襲いかかった。

イタリア野郎は、意表を突いた相手の攻撃をかわしきれず、獣^{けだもの}じみた呻きを洩らして上体を折り曲げた。

流山寺が握りしめたグラスを相手の額に叩きつけた。

グラスが鈍い音を立てて割れた。イタリア野郎がもりもりうって床に転がった。

流山寺は、カウンターに置いてあったジンの壺を掴むと、倒れた相手の横に膝をつき、無造作に後頭部を殴りつけた。

ファイティングショーは意外にあっけなく幕を降ろし

た。

流山寺はカウンターに戻り、低い声でバーボンを注文した。

啞然としていた酔いどれどもが、興を失って視線を元に戻していく。イタリア野郎は身体をくの字に曲げてびくりとも動かない。

助け起こす者もなければ、救急車を呼ぼうとする者もない。イタリア野郎はいつまでたっても床に放置されたままだ。バーテンもそしらぬ顔でグラスを洗っている。

別段、珍しいことではない。日に何度か起こる他愛のない喧嘩だ。酒場にすれば、拳銃をぶっぱなされないだけありがたかっただろう。

女が流山寺に感謝の眼差しを送って、さりげなく近寄ってきた。上品な香水のにおいがただよってくる。

「強いね、あなた」

「強いわけじゃない」流山寺が荒れた舌にバーボンをのせた。

「シアトルの酒場でボクサーくずれの黒人から喧嘩のやり方を教えてもらっただけの話さ。隙を突いて急所を蹴り、拳より堅いもので頭を殴りつけろとね。この二つが立てつづけに決まれば喧嘩はカタがつく」

「中国人じゃなさそうね」女が小首をかしげてほほえんだ。薄い唇から清潔な白い歯のぞいた。